

「壁のある街」

北海道立旭川東高等学校普通科2年 橋本 明莉

「あなたは壁のある街の人たちのことはどう思いますか。」

これは、昨年トランプ大統領が行う移民政策について「アメリカは建国以来移民で成り立ってきた国、彼の政策は間違っている。」と主張した私に投げかけられた質問です。

「壁のある街の人たち」こう聞かれた瞬間、私は頭が真っ白になってしまいました。なぜなら私は大統領の政策に、涙で抗議するアメリカ人の映像をみて共感していただけで、実際に壁のある街で暮らす人たちの想いを想像すらしたことがなかったからです。もし、私の住む町に不法に入国した人たちが住み始めたらどうだろう。彼らが何かトラブルを起こしたら穏やかでいられるだろうか。そう考えると、こうあるべきだと理想ばかりを並べ立てていた自分がとても恥ずかしくなりました。物事には両面があるのに、私は一方の側からしか物事を捉えていなかったのです。しかし、また、壁の向こう側にいる人たちの暮らしはどうだろう。もし、私が犯罪や貧困に苦しめられ、この壁の向こう側には幸せがあると思ったら、それが違法であったとしても、命がけで壁を越えようとするのではないだろうか、そう思うと、私はこの問題をどう考えていいのか分からなくなってしまいました。

今年に入り、日本と韓国の間で徴用工問題が起こり、日韓関係は戦後最低とまで言われるようになりました。テレビではコメンテーターが堂々と韓国のことを非難し、ネットは韓国への辛辣な悪口で充満されるようになりました。韓流ドラマや K ポップと言った韓国の芸能は日本人の幅広い年代層にまで浸透し人気を博していたのに、日韓両国の交流は途絶え、口にだすのも憚られるようになりました。秋に韓国旅行を計画していた私の両親までも、今韓国に行くのは危険だと旅行を取りやめました。ほんの数か月の間に、日本全体が見えない恐怖に取り憑かれていっている恐ろしさを感じます。尖閣諸島問題で端を発し、最悪と言われた日中関係が実に10年もの時を経てようやく改善され始めてきたのに、今度は日韓問題が起こってしまう。私は本当は仲良くしたいのに、国と国の関係次第でどうしていつも困難になってしまうのでしょうか。そんなやりきれない思いでいた私は、先日訪れた高校の見学旅行で、李秀賢さんと言う韓国人留学生の方のことを知りました。2001年1月26日、李さんは線路上に転落した男性を発見し、自らの危険を顧みず、助けようと毅然と線路に飛び降り、尊い命を落とされたのです。その瞬間、そこには日韓問題などあったでしょうか、あったのは、ただこの人を助けたいと思う、人間だけが持つ究極の人間愛ではなかったのかと、私は心が洗われる思いがしました。自分たちが本当は何を欲しているのか、本当はどうやったら幸せになれるのか分かっているのに分からないふりをしてしまう。行動に起こさず黙ってしまう。それこそが私たち日本人の問題だと思うのです。不法移民の問題も見てみぬふりをしてはいけない、どうしたら壁のある街に暮らす人にとっても、不法に入国を試みる移民にとっても最善なのかを考える努力をやめてはいけない、すぐに答えが出なくても、人間愛を貫くその歩み自体に価値があるのではないかと思うようになりました。私は日本

と言う平和な国に住んでいます。テロも貧困もあまり縁がありません。だからその反対の環境にいる人たちのことを想像しないのは、自分たちさえ幸せならいいと思う自覚しにくい差別ではないのかと思うのです。地球の反対側にいる人でも、互いに願うことが平和であれば、たまたま恵まれた環境に生まれた人間が彼らを見捨てない努力をする。そこで大事なことは国境に接した街、国だけが負担をしないということです。壁のある街の人も、壁の向こう側にいる人たちも見捨ててはいけないということです。その問題を人種、国境を越えた地球上に住む全ての人の課題であると一人一人に自覚させなければいけないと思うのです。

「壁のある街の人たちをどう思いますか。」この質問に答えるにはまだ私は、机上の空論を展開しているだけに過ぎないかもしれません。でも、だからこそ不法移民の問題が実際に存在し、その渦中で生きるアメリカの同世代の人たちの話を聞いてみたい、私も自分の問題として同じように悩み、あきらめない勇気を持ちたいのです。それは日韓の間にある越えがたい悲しみから目を背けずに、困難だからこそ努力しようとする原動力になれると思うからです。宗教、差別、歴史、環境と私たちの生きる地球は問題が山積みですが、未来はまだ決まっていません。次の世代により良い世界を贈れるように、李さんのように勇気ある人生を送りたいと思います。